

<山繭と暮らす>

桑原 紀子

昨年夏のヤママユの卵から、3月の終り、小さな幼虫が続々生まれてきました。

コナラやクヌギの若葉を食べ、4回の脱皮を繰り返し、今は8cmの大きさの終令幼虫です。縁側にダンボール箱を並べ、その中に背の高い花瓶4つを入れて、コナラ、クヌギの枝を沢山挿します。もともと雑木林にいるヤママユは、お日様や雨が必要なので、林の環境を作ってあげるので。

蜂や鳥が食べにこないように、蚊帳を吊ると、まるで、アラビアンナイトの舞台のようです。新鮮な枝を入れると、パリパリと葉を食べる小さな音があちこちから聞こえてきて、なんだかほっとするのです。



夕立の後、箱に雨水が溜まって、うっかり落ちた幼虫が水死状態になったことがあります。すぐに救い出し、ティッシュで幼虫を拭い、少し押すと口から水を吐き、やがてモゾモゾ動き出しました。脱皮の時は数匹が一斉に脱皮します。一回り大きくなった身体は、まだ柔らかく透き通るような緑色です。頭と爪は羽化したばかりの蟬のような白です。

ヤママユを自宅で育てている仲間が、今年は3人。

緑の繭になった・・・と、昨日メールが入りました。早いね！おめでとう！と返信します。家のはまだ少し小さい。餌が足りないのかな、と心配そうな仲間。3匹がひとつの大きな繭を作ったという仲間。幼虫と暮らす若葉の季節、少し野生的な表情の仲間たちです。